推しのメンズ地下アイドルと簡単にセックスした俺の彼女

036

この作品はフィクションです。
実在する人物・団体・事件とは関係ありません。
また、登場人物は全員十八歳以上です。

登場人物

りる　大学生。メンズ地下アイドルの大ファン。黒髪ツインテールの地雷系女子。細い目と揃えた前髪が特徴的。言動がオタクっぽい。

鉄平　りるの彼氏。りると同じ大学。勉強ばかりしてきた、硬派な真面目男子。

渚　ＪＫ。オタク系ギャルでメンズ地下アイドルの大ファン。露出の多いド派手な服装。日サロで焼いた浅黒い肌。ふわふわの長い金髪。巨乳。

翔貴　渚の彼氏。派手な頭髪のチャラい系男

子。渚と同じ高校。

美砂　渚の親友。渚と同じオタク系ギャルＪＫ。派手な髪色のショートカット。背が高くグラマラスボディー。

早乙女隆治　メンズ地下アイドルグループのメンバー。筋肉質の逞しい長身と、金髪マッシュルームヘアーの爽やかイケメンアイドル。しかし、その正体は…。

第一話

『推し』。

最近なにかと、もてはやされる概念。特定の人物やキャラクターを、熱烈に愛したり応援したりすることを指す。世間もその概念に結構好意的で、推しがいると人生が豊かになっていいなんていったりもする。

だが、最愛の彼女に推しがいる場合、そんな呑気なスタンスではいられない…。

「……」

ローテーブルに前のめりでもたれかかり、熱心にスマホ画面とにらめっこする彼女のりるを、俺はなんともいえない気分で見つめる。

今日は俺の部屋でお家デートなのだが、いつしか二人の会話は途切れ、りるはすっかり自分

の世界に没頭していた。きっと彼女は今、推しのメンズ地下アイドルのことで頭がいっぱいなのだろう。こういうことは、デート中でもままあった。その度に俺は、彼氏としていたたまれない気持ちに苛まれる。

同じ大学の同じ教室で知り合ったりるは、高めの長い黒髪ツインテールが特徴的な、俗に量産型とか地雷系とか呼ばれる女の子だった。ファッションもゆるふわ系やロリータ系が多く、綺麗に揃えた前髪は可愛いが、細い目の下の涙袋を派手に染めた真っ赤なアイシャドウは、人によっては奇異に映るかもしれない。

そして付き合い始めてから知ったことだが、その系統の女の子のイメージに違わずオタク的な傾向が非常に強く、彼女には熱烈に応援している推しがいた。

その推しとは、とあるメンズ地下アイドルグ

ループに所属する早乙女隆治なる男。逞しい長身と、スタイリッシュな金髪マッシュルームヘアーがトレードマークの、目を見張るほどの爽やかイケメンだ。年頃の女の子なら、誰だってそういう憧れの対象の一人くらいいるものだと思うが、正直メンズ地下アイドルというのがどうも気に食わない。

テレビ画面の向こうのアイドルと違って、メンズ地下アイドルとはいとも容易く触れ合える。会話も出来る。顔や名前だって覚えてもらえる。彼氏として、そこからなにか良からぬ間違いが起こるまいかと、不安になってしまうのだ。勿論そんなことは、滅多にあるものではないと承知してはいるが…。

俺自身が大学に入るまで受験一筋で無趣味なこともあり、毎日推しに夢中になり、推し活資金のために日夜バイトに明け暮れる彼女の

生態は、理解しがたいものだった。りるの内面は地雷系のイメージとは異なり、とても優しく彼氏思いで、基本は至って常識的な女の子だからこそ、そう思う。これさえなければ。彼女に、推しさえいなければ…。

「……」

突発的な不安に駆られた俺は、依然スマホに没入中の彼女に声をかける。

「…なあ…りる」

「…ん～？」

「…ちょっと話…いいか？」

「…え…ちょい待って…今ね…推しがＳＮＳ超連続投稿してて…こ、これはリアタイで追わねばならぬ…」

「……はあ」

俺の口から思わずため息が漏れる。そしてつい強い口調で言ってしまう。

「なあ、りる！俺とそいつとどっちが大事なんだよ！」
一瞬で、部屋の空気が凍りつく。彼氏として、みっともない言葉かもしれなかった。りるはスマホから顔をあげ、多分に戸惑いを含んだ表情で俺を見る。
「……鉄平くん」
「……」
俺は思わず、目を逸らしてしまう。
「……気に障ったなら…謝る…ごめん…今のあたし…態度悪かったよね、た、確かに…う、うん…」
「……」
「…で、でもね、ま、前も少し言ったかもしれないけど、推しと彼氏は、べ、別のものなの。あ、あたしが推しに夢中になって、彼氏として面白くないのはわかるけど、お、推しへの感情

と、鉄平くんへの感情は全く別のものなの。推しへの気持ちは、恋愛感情とは全然違うものなの。ほ、本当に。それはわかってほしい。それだけは。れ、恋愛的に好きなのは鉄平くんだけだから。本当に。推しへの気持ちは、れ、恋愛感情とは別の水準の、べ、別の位相のものなの。はあ、だ、だからあたしの推し活、理解してほしい。ああ…で、でも、今のはよくなかったよね。せっかくこうしてお家デートしてるのに、て、鉄平くんの前で推しに夢中になるなんて。それはよくないよね。本当に。はあ…それは本当にごめんなさいです…以後気を付けます…」

オタクらしい吃音まじりの早口で一気にまくしたてた後、極端にストレートな前髪と記号的黒髪ツインテールの彼女は、必要以上に大袈裟に頭を下げてみせた。その仕草も、やはりどこかオタクっぽかった。

「……」
やや調子っぱずれな感もあったが、その姿に、彼女としての誠意を感じたのも事実だった。
「…もういいよ……いきなりデカい声だして、俺の方もごめんな」
「…鉄平くん」
りるは顔をあげた。赤いアイシャドウに彩られた細い目をさらに細くして、微笑みを浮かべる。その顔はどこか猫を思わせて、とびきり可愛かった。
「…そうだ。ゲームでもしないか？友達に借りたんだけど」
「あ、うん、するする！あたし、ゲームならなんでもすきぃ～☆」
何事もなかったかのように、俺達はありきたりなお家デートに戻る。彼女の言葉を信じようと思った。先程のりるの理論には、なにかアイ

ドルオタクとしての確固たるポリシーのようなものが感じられた。そこまで深く考えて推し活に向き合っているのなら、俺が心配するような間違いが起こることもないだろう。

そして俺の方も、もう少し寛大にならなければならない。あれほど必死にバイトしてまで打ち込むほどの趣味なのだ。りるにとっては、よほど大切なものなのだろう。彼氏として、受け入れてあげるべきなのだと思う。

（…やっぱりこれからも…りるとずっと一緒にいたいからな…）

俺の肩にちょこんと頭を預けてコントローラーを握る彼女を見ながら、心からそう思った。

※※※

（はあ～まだかな～まだかな～。あ～。あ～。…きゃはん☆）

定期ライブ終演後、二枚のチェキ券を握りしめ、あたしは女の子達の行列に並んでいた。高鳴る気持ちを抑えきれず、その場で馬鹿みたいに足踏みを繰り返したりする。

チェキ券一枚のためにＣＤ十枚。合計二十枚のＣＤを一度に購入した。汗水垂らしたアルバイト代が一瞬で消えたわけだけど、あたしはなんら後悔なんてしていなかった。むしろ推しのために迷わず散財出来たことが、誇らしいまである。

（あ～。あ～。早く会いたい…早く会いたいよお～……隆治くぅ～～ん❤❤❤）

遅々として進まない時間にやきもきしつつ、あたしは眼前で列をなす女の子達を観察する。

やっぱり、みんな相当可愛くオシャレしてきている。当然だ。推しに会うんだから。かくいうあたしも今日は、得意のゆるふわ地雷系コーデでバッチリ決めてきた。キュートなフリルがいっぱいついたピンクのブラウスと、ガーリーな黒のロングスカート。前に推しが似合うと言ってくれた系統のコーデだった。無論、髪もメイクも抜かりはない。メイクに関してはライブの後にトイレで念入りに直した。前髪もちゃんと揃えた。

（…りゅ、隆治くん…今日のりる…可愛いって思ってくれるかなぁ？…お…思ってほしいな…隆治くんに…い、いっぱい可愛いって思ってほしいなぁ、りるのこと…はあ……隆治くん…今日、りる…隆治くんに可愛いって思われたくて、いっぱいいっぱい頑張ってオシャレしてきたんだよ…あぁあん♥♥♥）

あと少しで会える推しのことを思うと、幸せな気分が溢れて仕方ない。妄想が止まらない。それはきっと、ここにいる女の子達みんな同じだと思う。

目の前の行列が少しずつ短くなり、ついに順番が回ってくる。そしてあたしは誘導スタッフによって、こちらからの視線が遮断された、ついたての向こう側に案内された。

そこに、最愛の推しがいた。

「お、りるじゃん！」

あたしの姿を認めるなり、推しは笑みを浮かべて名前を呼んでくれた。こんなに嬉しいことはない。推し歴の長いあたしは、推しに認知されていた。

「はあ…りゅ…隆治くん…こんにちは❤」

オタクっぽい野暮なアクションだとわかりつつも、あたしはたどたどしくペコリと頭を下

げた。
「はい、こんにちは。いつもありがとうな」
「い、いえ。そ、そんな。はあ…きょ、今日のら、ライブ、す、すごくよかったです！と、特にソロで踊るところの表現力がすごくて！あ、圧倒的で！指先の細かい動きまで完璧で！ほ、本当に！さ、最高のパフォーマンスでした！はあっ！」
推しを前にすると緊張でどもりがいつもよりでてしまうけど、あたしは伝えるべきことを頑張って伝える。ステージ衣装からラフなシャツとジーンズに着替えたあたしの推しは、その言葉を受け止めてくれる。
「マジで？サンキュー。あは♪…りるはホントちゃんと見てくれてるよな？…俺、今日はいつもよりかなり気合い入れて踊ったからさ。わかってくれて嬉しいよ。…さすが古参だ(笑)」

「はあ…♥」

真正面で向かい合う推しの姿に、つい見惚れてしまう。男らしい長身の逞しい体躯。そしてそれとはどこかアンバランスともいえる中性的な金髪マッシュルームヘアーと、繊細で柔らかな造形の顔面。カッコいい。カッコよすぎる。

（ああ…尊い！尊すぎる！推し…あたしの推し…もう尊すぎる！）

推しとの至近距離での対峙。信じ難い夢のような状況。何度経験しても、この瞬間は新鮮な興奮と感動にあたしをいざなう。

「よし。ほんじゃ早速チェキ撮るか。二枚だな。ポーズどうする？」

「あ…あの…い…いつもの…だ…だ…だっこで…お願いします」

「オッケー。…ほら。おいで、りる」

「はあ…はい♥」

促され、あたしは両腕を大きく広げて推しに真正面から抱きついた。推しは右手であたしの後頭部を優しく撫で、左腕であたしの体をギュッと強く抱き締めてくれる。

先程の誘導係を兼ねたカメラマンが、その様子をチェキで撮影する。高いついたてに遮られて、順番待ちの行列からはこちらは見えない。カメラマンを除けば、ここは推しと二人だけの密室空間。だからぶっちゃけ、少々過激なことをしてもバレやしない…。

これが、メンズ地下アイドルのチェキ会というものだった。あたしも昔は、テレビ画面の向こうの有名アイドルを健気に応援していた。とても遠い場所から。でもこの世界を知って、もうそちら側には絶対戻れない。

彼氏には、メンズ地下アイドルを応援していることは伝えてある。だけど、こんな過激なサ

ービスがあるとまでは言っていない。真面目で若者カルチャーに疎いあたしの彼氏は、知る由もないだろう。彼女が自分の知らないところで、推しのアイドルとこんなにもぴったり体を密着させているだなんて…。

（はあ…て…鉄平くん…ご…ごめんね～☆はあ…り、りる…て、鉄平くんの彼女のりる…あぁ…お、推しとこんなにも激しく…こ…こんなにもぴったりがっちり…だ…抱き合っちゃってまぁ～～す…い…いえ～～い☆はあ…ご…ごめんなさい…て…て…鉄平くん…り…りる…しょ、衝撃の告白…し…します…はあ…りる…お…推しにギュッって…ギュ～って…だ…だっこしてもらって…い…今…ちょ…ちょっとだけ……濡れてます。はあん！や、やべ！言っちまった！やっべ！クソやっべ！）

あたしは背徳感にゾクゾクしながら、頭の中

で彼氏にはっちゃけたメッセージを送ってしまう。テンションが壊れてしまうほどに、推しとの密着は超刺激的なのだった。脳が覚醒して、良からぬ物質が頭にガンガン分泌される。

一枚目のチェキ撮影が終わる。

「…ほい、おっけー。二枚目どうする、りる？」

一度体を離し、推しが訊いてきた。あたしは勇気を振り絞り答える。

「はあ…ゴクッ…あ…顎クイ指チュー！お願いします！」

「ふふっ…りる…お前オタクっぽくて地味な女のくせに…超積極的だな…っていうか…スケベだな、お前」

「はあん❤」

じっと目を見て罵られ、ドキリとしてしまう。推しにスケベと言われたことが、何故だかすごく嬉しかった。

「まあ、いいぜ。お望み通りにしてやるよ…来な、りる」
「はあ…はい♥」
推しの男らしい催促に従い、あたしは再び真正面から彼に近づいた。そして両手を下ろし、顔面だけを前に突きだす。そのあたしの顎をやや乱暴に右手でクイッと持ちあげる推し。あたしは目を閉じ、心も体も全て彼に預ける。本当に、なにをされてもいいと思った。あたしの唇に、推しは左手の人差し指一本を挟んでキスをする。そんな二人の姿が、カメラマンによって淡々と撮影される。
二人の唇の間には、指が一本ある。決して唇は触れ合っていない。そこには厳然たる隔たりがある。だからこれはキスではない。だけど、疑似的なキスであるとはいえる。なによりあたしは、本当に推しとキスしている気分になって

いる。
（はあ！ああ！し、してる！してる！チューしてる！推しとチューしてる！あたし！今！推しとチューしちゃってるぅうう！ああ！ああ！幸せ！幸せ幸せ幸せ！もう超しあわせぇえええ！推しとチューするの超しあわせぇえええええ！！！）
心臓がバクバク暴れる。推しの指の感触が唇を覆う。推しの吐息が聞こえる。推しの匂いが鼻孔をえぐる。
（う、ううん！し…したい！ホントにしたい！推しとチューしたい！ホントにチューしたい！したいしたいしたいしたい！チューしたいチューしたいチューしたい！あたし！推しとチューしたい！はあああん！推しと本当のチューしたいよぉおおおおおお！！！）
昨日、機嫌を損ねた彼氏に、説明した。推し

と恋愛は別だと。推しに向ける感情と、彼氏に向ける感情は、別のものだと。もっともらしい言葉で、推し論を語った。

だけど。

（はぁあああああ！ごめんなさい！ごめんなさい！鉄平くんごめんなさぁあああああい！はあ！ああっ！嘘です！昨日のあれ！りるの推し論！りるのオタク論！あ、あれ！真っ赤な嘘ですっ！はあ！推しと恋愛は別とか嘘ですっ！別の水準とか嘘ですっ！あ、あんなのあの状況を逃れるために咄嗟にでた口から出まかせに過ぎません！ああっ！い、一緒です！完全に一緒です！推しへの感情と恋愛感情は完全に一緒です！はあ！り、りるの中で！両者は完全に一致してます！ああっ！り、りる！普通に推しのことが好きですっ！恋愛的な意味で好きですっ！れ、恋愛的な水準で好きなんです！

はあ！なあっ！りる！りるっ！普通に男として推しのことが大大大大大大大大大大大大大大好きですぅううう！んんっ！なあ！つ…付き合います！も…もし推しと付き合えるなら！もしそんな奇跡みたいなことが起こりえるなら！りる！普通に推しと付き合います！迷わず推しと付き合います！絶対付き合います！絶対に絶対に付き合います！ああ！す…好き❤りゅ…隆治くん好き❤隆治くん好き❤隆治くん好き隆治くん好き隆治くん好き❤❤❤はぁん❤好き❤好き❤好き❤好き❤好き❤好き❤好き❤好き好き好き好き好き好き好き好き好き好き好き好き好き❤❤❤すきすきすきすきすきすきすきすきすきすきすきすきすきすきすき❤❤❤隆治くんすきぃ❤隆治くんすきすき❤隆治くんすきすきすきすきすきすきぃいいい❤❤❤ああ！つきあいたいつきあいたいつきあいたい❤隆

治くんとつきあいたいよぉおおおおお❤❤❤❤❤）

なんのしがらみも忌憚もない本音中の本音を、あたしは心の中で爆発させた。彼氏には絶対聞かせられない魂の咆哮だった。ここまで野性的にリビドーを解放させるのは、この夢のような時間がほんの一瞬で終わることを、痛いほどに理解しているからだ。

「はあ…あぁ…んん…ゴクッ」

案の定次の瞬間、推しの指は、推しの顔は、あたしから離れていた。あっと言う間だった。現実に引き戻される。少しずつ興奮が静まっていく。呆気ないものだった。

彼女としての最低限の品位を守るためだろうか、あたしは無意識の内に彼氏に謝罪を述べていた。

（…て…鉄平くん…ごめんね…こ…これがり

るの本音…りるの本性…あぁ…彼氏いるのに…推しに本気で恋しちゃってる痛い地雷系女子…それがあなたの彼女なの…はあ…で…でも安心して、鉄平くん…そんなこと…絶対に起こらないから…推しと付き合えるなんて…絶対にありえないから…りゅ…隆治くんは…あ、あたしみたいな…ぶ……ブス…絶対相手にしてくれないから…メン地下とはいえ…人気アイドルなんだもん…ほ…ホントはわかってる…うん…あたしなんかとは…住む世界自体違うんだよ…だから大丈夫…あたしはこれからも…ファンとして真摯に彼を推していくだけ…りるは…これからも鉄平くんの彼女…鉄平くんの彼女の…た…ただの量産型女子のままだから…はあ…)

心の中で言葉を積みあげながら、あたしはえもいわれぬ寂寥感に包まれていた。幸せなチェ

キ会の終わりは、反動でいつもセンチな気分になってしまう。

いつの間にか撮影係のスタッフはついたての向こうに消えていた。アイドルビジネス的にはお金を払った分以上のコミュニケーションは断固取れないようにすべきなのだろうが、このグループの運営はその辺りが結構緩く、こうしてチェキ撮影後に少しだけ推しと二人きりにしてくれて、ファンに猶予の時間を与えてくれる。勿論それとて有限だけど、無理矢理推しと引き剥がされるよりずっといい。撮影場所を半密室にしてくれる点も含めて、オタクにとってはとても良心的な運営といえた。

「はあ…ありがとうございました…隆治くん…こ…これからも応援してます…頑張ってください…」

別れを惜しみながら、あたしは推しに告げた。

推しからもテンプレ的な挨拶が返ってくるはずだった。だが、彼はいつもとは全然違うことを言ってきたのだ。明らかに撮影係のスタッフに聞こえないようにするために、小さく声を潜めて。

「なあ、りる…ライン教えてくれね？」

「え…」

あたしの全身が、すっと冷たくなる。

「ダメか？ほら、今ならスタッフにバレずに交換出来るし。急げば。…な？」

「あ…は…はい」

あたしはスマホを取りだし、彼の要求に咄嗟に応えていた。なにも考えることが出来なかった。

「…よし、オッケー。サンキュー。…じゃあ、また今度連絡するな」

「……」

推しは、少年のような悪戯っぽい表情で、秘密を共有したあたしにウインクしてみせた。それは、アイドルとして不特定多数のファンに見せるものとは別の、あたし一人だけに見せてくれた顔なんだと、直感していた…。

ついたての向こうに吐きだされる。スタッフからとても事務的にチェキを渡される。夢の時間は終わり、目の前には日常の風景が広がっていた。だけど、一つだけ違うことがある。この手の中のスマホに、推しがいる。電子情報ではない、生の肉体を持った、推しがいる。

（…推しと……つながっちゃった…）

あたしは、愕然としていた。

※※※